HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「西南」と「極東」の間に：「二重の周縁」の視座からみる近代雲南
Author(s)	董, 子昂
Citation	The Journal of Next-Generation Humanities and Social Sciences, 20, 85-108
Issue Date	2024-04-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92780
Type	article
File Information	DONG_vol20_2024.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『次世代 人文社會研究』, 第20號(2024), pp. 85-108.

「西南」と「極東」の間に
―「二重の周縁」の視座からみる近代雲南―

董子昂*

1. はじめに
2. まなざしの交差：雲南に対する記録と想像
3.『雲南遊記』の響き：反仏ナショナリズムの創出
4. 受容と抵抗：まなざしの内面化と「軍国」への志望
5. 結論

要旨

「雲南」という言葉は、直訳すると雲の南である。つまりこの地域は中華帝国の想像の産物として、帝国の南の空に漂う雲の下の場所を意味する。それゆえ雲南は、長きにわたって中心から遠く離れ、後進的な多民族が雑居する辺境地域と認識されていた。しかし19世紀後半から、フランス人が著わした旅行記が大量に出版されると、そこで雲南は南仏に似た暖かい気候をもち、開発を待つ処女地として描かれた。こうしたフランス語の旅行記は、無論植民地主義の色彩を帯びているものの、その一方で中華帝国による従来の語りとは異なるもう一つのナラティブを含んでいる。本研究は、二つの帝国が雲南に投げかけたまなざしの交錯から、雲南がいかにして中華帝国の西南とフランス殖民地帝国の極東に位置付けられ、「二重の周縁」として構築されたのかを分析する。また本研究は、近代雲南知識人が発刊した新聞雑誌を分析し、彼らがいかに周縁性を思考し、さらに主体性を創出したのかを検討する。

キーワード: 二重の周縁、雲南、まなざし、近代、メディア

* 北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院 博士課程

1. はじめに

雲南はしばしば「西南中国」の枠組みから論じられている。張（2010）の指摘によれば、「西南」は基本的に雲南、貴州、四川の三省を中心とする地域であるが、時期によって政治的、社会的な要素に伴い、その範囲が絶えず変化していたため、地理的単位というよりも地政学的な地域概念である。同時に、雲南を含む「西南」地域は中国の少数民族が居住する地域であり、歴史上中華世界の周縁として同化された一方、同時に「内なる他者」（王　2007）として見られていた。

しかし、十九世紀に入ると、現在の中国、朝鮮半島、日本やベトナムといった地域全体は、ヨーロッパにより「極東」The Far East; L'Extrême-Orient）という言葉を用いて「発明」された（シャンタル・メジェ 2015：327-328）。「極東」の内陸部にある雲南は、十九世紀前半に起きたヨーロッパの海上貿易の商業開拓を免れたものの、1870年代に入るとビルマから雲南へと勢力を伸ばしたイギリスと、インドシナ半島で植民拡張を続けていたフランスにとって、豊富な資源と商業的な潜在力を有する地域と認識されるようになる（Summers 2013:39-42）。このような商業利権と資本の輸出を先導として、帝国のイデオロギーがその後押しをするイギリスとフランスが行う植民地獲得競争の波が雲南まで押し寄せてきた結果を、パニッカル(2000:210-213）は「雲南問題」の出現と説明している。

「雲南問題」の出現は「西南中国」が意味する単一の「中心-周縁」関係が維持できなくなることを意味している。なぜなら、十九世紀の雲南は西欧が中心となる近代世界におけるもう一つの「中心-周縁」関係に組み込まれてきたからである。つまり、近代雲南を検討する際、西南中国という単一のアプローチよりも、異なる文化が出会い、衝突し、格闘する場所として、中心との動的な地域関

係を維持し、時には緊張感が高まる「接触地帯」（Contact zone）（Pratt 2007:7-8）としての地域特性を重視しなければならない。

これまでの研究について、胡(2017:2-3)の指摘によれば、中国で行われてきた多数の「西南研究」は中国の「辺疆研究」の産物であり、「統一多民族国家」の存在が大きな前提となっている。例えば、蒋・王（2011）の分析では「一国史」の枠組みが採用され、雲南の近代を説明する際に地域独自の文脈が見落とされている。一方、雲南の「独自の近代化」を検討した石島（2004）の研究では中国において国民国家が形成されていく過程で雲南と中心の力関係を論じているが、ヨーロッパが雲南の近代に与えた影響に関する議論は十分とは言えない。

そこで、十九世紀以来雲南の地域特徴を重視するため、本研究では「二重の周縁」視座を導入する。白（2016：76）によれば、「二重の周縁」とは「西欧中心の世界史展開で非主体化の道を強いられた東アジアという周辺の目と、東アジア内部の位階秩序に抑えられた周辺の目が同時に必要だという問題意識」である。ここで言われる中心と周縁は、単に地理的な位置を指すものではなく、「自分が周辺でありながらより一層の周辺的な部分に対しては中央となって、その周辺を差別し抑圧するといったように、両者が限りなく連鎖の輪を作りながら抑圧を移譲する価値論的次元の関係を意味する」と指摘されている（李2014）。

「二重の周縁」視座は、従来の研究において、北朝鮮・韓国と同じ「分断体制」を有する日本・沖縄、中国大陸・台湾の関係を検討する際に用いられてきた（孫2011；白2016:169-195）。それに対して本研究は、近代世界と中華世界の交差と抑圧によって生まれる価値論の意味でこの視座を使い、視座の有効性と射程を検証したい。

要するに、本研究では、近代雲南に関する従来の研究に見られるアップダウン式の研究視点とは対照的に、近代雲南を「核心現場」

と見做し、テキスト分析の手法を用いて多言語の史料を分析することによって、雲南に関する言説生産を分析する。より具体的には、雲南の地方志、フランス人の雲南旅行記、そして雲南人による作られた新聞雑誌などを材料として、中華による秩序の下位に位置づけられてきたと同時に、西欧による非主体化を強制されたという二つの背景のもとで、雲南に関する言説はいかに「二重の周縁性」をもたらしながら更新されたのか、さらに「二重の周縁」を脱出しようとした雲南人がいかに見られる側から見る側へと転換し、自らの主体形成を目指したのかを検討する。

2. まなざしの交差：雲南に対する記録と想像

2.1 中華世界のなかの雲南

「雲南」について、中華帝国の歴史地理知識を継承する地誌学の大著である『読史方輿紀要』では、「昔蛮夷と瘴癘の郷であり、中原から最も離れている。中国を統制する者が、その勢力をまずここで及ばすことはできない」[1)]という評価が下されている。

このような評価に対して、川野（2005：219-272）の議論からすれば、瘴癘の範囲が雲南の非漢民族の居住地域に重なる傾向を示していたため、雲南の非漢民族が瘴癘、蠱毒などとともに、危険視されながらも、一種のエキゾチシズムとして作られた。つまり、中華の目から見れば雲南は野蛮人や瘴癘などが存在し、中原から遠く、王朝の支配が十分に及ばない地域であった。

1)　(清) 顧祖禹撰,賀次君・施和金點校（2005）『讀史方輿紀要』中華書局,p5026.

このような認識は、「雲南」という呼称自体にも反映されている。明の時代に編纂された雲南の地方志である『滇略』を確認すると、「漢の皇帝が狩猟をした時に、彩雲が南中というところに現れ、そして[そこに]使者を派遣した。雲南の名はここから始まる」[2]という記述が残っている。この「彩雲南現」の逸話から雲南の名を得たとする説の他、栗原（2011:11）は雲南が雲嶺という大きな山脈の南にあったからだとする説などを挙げている。

しかし林(2010:308-309)は、漢代に設置された「雲南県」を「雲南」に関する最古の語と考え、「雲嶺」という地名の出現より「雲南」という語の出現の方が早いとして、「雲嶺」説を否定している。林は、「雲南」とは雲南県西北に位置する「雲山」の南にある地という意味であるが、雲南県（現在の祥雲県）の西北には鶏足山という山があるため、「雲山」の南とは鶏足山の南という意味に由来するという。

楊(2021:38)は、これら雲南の呼称に関する説について、中華王朝と周縁との朝貢関係のなかで織り出された「朝貢言語」（tributary language）の産物として鋭い批判を加えている。雲南の呼称のみならず、朝貢関係が反映する「天下」観からすれば、雲南の非漢民族への評価も中原と円心する中華的価値の受容の程度によって判断が下されている。

清中期に雲貴総督伯麟が嘉慶帝の諭旨を受け、1820年頃に完成した絵画集『滇省夷人図説』は、中華の目から見た雲南に居住する非漢民族への心理的接近性の差異を反映している。その中では、中心部に居住し、開化の程度が高いとされていた雲南中部の「白人」が「農業に従事し礼を知る」と評価されている[3]。一方雲南中部と南部

2)　(明) 謝肇淛撰,王雲五編（1972）『滇略巻一』商務印書館,p4.
3)　(清)伯麟編,揣振宇點校（2009）『滇省夷人図説 滇省輿地図説』中国社会科学出版社,p.3.

にいた「猓玀[ママ]」が「耕作に勤め、男女皆物を負って遠いところに行く」と記され、さらにより遠い雲南西部の騰越にいた「野人」については「髪が赤く目が黄色で、夜に木のこずえに宿り、動物を取って食べる」と述べられている[4)]。

要するに、帝国の中心から遠く離れた地理的位置、瘴癘という特有の気候風土によって発生する熱病の存在、および「蛮夷」とされた複数の非漢民族の居住によって、雲南は、中原の人々に「異様な目」で見られていた（張 2012）。この「異様」さは、まさに「西南」の枠で雲南という中原から遠く離れる地域への認識を反映している。言い換えれば、雲南は中華世界の域内と見られるものの、階層秩序によって支配と被支配の関係が差別を受けながら維持されてきた。

2.2『雲南遊記』：帝国知の結晶と最後の楽観主義

状況が変わったのは十九世紀に入ってからである。雲南はフランスの極東進出の目標とされ、開発、および植民の対象となった。フランスの雲南進出を支えたのは、主に三つの勢力、つまりグローバルに植民システムの前哨を置いた宣教師団体、「経済帝国主義」といわれる極東に対する経済的な関心が高まる商業組織、そして軍事と制度の保障を提供した第三共和政のフランス政府であった。

清仏戦争（1881-1885年）後、特に『天津条約』の締結により、フランス人のキリスト教布教権や通商権が保障され、雲南での布教活動が再び活発的に展開されていた。雲南のカトリック教会の宣教はパリ外国宣教会（Missions étrangères de Paris）によって独占的に担われてきた。1880年代まで、雲南教区にはフランス人司教1名、フ

4)　上掲書、p.7;67.

ランス人宣教師25名、中国人宣教師7名がおり、信者数は1万221人にまで発展した。そして教会または礼拝堂が53か所、神学校が1か所、学校または孤児院が60か所あり、それらがほぼ雲南省全土に設置されていた（Michaud　2007:153-154）。

宣教活動を除き、フランス人宣教師は雲南で動物や植物を採集し、現地民の風俗習慣などを記録することを通じて、帝国の博物学や人類学の発展に大きく寄与した。例えば、ジャン=マリー・デラヴェ(Jean-Marie Delavay)は同時に植物採集家として知られ、十九世紀末まで雲南北部で4000 種以上の高山植物の標本を収集し、フランス国立自然史博物館などに送り続けていた（Cox 1945: 115-118）。また、アルフレッド・リエタール(Alfred Liétard)は雲南のイ系民族に対して現地調査を行い、その呼称、分布、日常生活と信仰などを記録している（Liétard 1913）。

一方、1895年、リヨン商工会議所は雲南を中心に大型調査団を派遣し、雲南を中心とする西南中国各省の絹織物業、綿業、鉱山業、商業などを調査し、報告書を出した（武内 2003）。1898年、インドシナ総督ポール・ドゥメール（Paul Doumer）はフランス議会で借款交渉を行い、鉄道を敷設するためインドシナ銀行などからの借款の承認を得た。1901年、ドゥメールがようやく借款団と協定を締結した。同年インドシナ・雲南鉄道会社が設立され、工事も着実に推進された（篠永　1992）。

1889年代から1900年代にかけて、雲南の鉱山資源、動植物、民族などがフランス帝国によって系統化され、ヨーロッパの認識の枠組みを通じて生産されていた。その結果、本来中華世界にある一つ未開な周縁に過ぎないと見られていた雲南に関する認識はフランス帝国の到来によって更新されていた。

そのなかで、フランスの写真家、探検家であるジュール・ジェル

ヴェ＝クールテルモン（Jules Gervais-Courtellemont）が1904年に『雲南遊記』*Voyage au Yunnan*を出版した。『雲南遊記』は二十世紀初の雲南社会の状況と当時の国際情勢や国際関係を記録したものといえ、フランス帝国が収集した雲南に関する膨大な知識が掲載された作品である。しかしこの近代雲南の研究にとって極めて重要な文献に対して、従来の研究では中国語の解説文に頼る傾向があり、原文に関する検討は十分になされたとは言えない。

1902年、クールテルモンはドゥメールの委託を受けて、雲南で秘密調査を行った。同年５月３日から翌年の秋にかけての18ヶ月間、クールテルモン一行は荷付きを雇い、馬を使ってトンキンを出発して雲南に入った。その後蒙自を経由し雲南中部の昆明と大理に至り、さらに雲南西部を経てから道を戻り、旅を終えた。

『雲南遊記』ではまず、フランス帝国にとっての雲南の重要性が強調されている。クールテルモンは雲南開発の青写真を提示し、雲南が地下に埋蔵されている豊富な鉱山資源と広大な市場を有する地域だと信じ、「鉄道の建設が完成されると、我々の全く予想していない無限の交易が発生し、拡大していくことは間違いない」[5]と予想していた。

雲南の気候に注目したクールテルモンは、雲南旅行の途中、度々フランスの風土を思い出した。クールテルモンによれば、雲南は緯度から見れば熱帯に位置するが、同時に高原に位置するため、穏やかな気候があり、フランスと非常に似ていたという[6]。また、フランス人がいるかどうかに関係なく、雲南の数々の町や集落を見ると、クールテルモンは「ヨーロッパの小さい町蒙自」や、「アルジェリ

5)　Jules Gervais-Courtellemont.（1904）*Voyage au Yunnan*. Plon, p.69.
6)　Ibid. p.6.

アやチュニジア南部のクスール山脈の風景を思い出させた」[7]と述べている。8月2日、道中空を仰ぎ見たクールテルモンは、「水色の空は清らかさの極みにあり、雲も小さな巻雲もない。これはプロヴァンスの空だ」[8]と感嘆した。

このような空間体験は、ある種の「心象地理」（サイード1993:132）から説明できる。つまり、Blais他（2011: 7-21）の指摘からすれば、西欧以外の地域を世界史的空間として探検し、地図に制作した結果、その地域自体が否応なく帝国によって呑み込まれてゆく。また、帝国のグローバル拡張の中で、探検家や学者らが作った知識のネットワークで生まれた植民地空間への親近感と類似性の体験は、実際には植民地に投げかけられた欲望と不安の影である。

クールテルモンはまさに、「準植民地」とされた雲南に対して誘惑と危険を同時に感知していた。

> 初めて見たこの美しい雲南、この本当の雲南は私たちの記憶と心に深く刻み込まれ、永遠に良い思い出として残るだろう。ここは我々ヨーロッパ南部の温帯諸国によく似ており、フランス人にとって自らの自然環境から離れ、母国とのつながりが切断される熱帯地域と著しい対照的な存在となる。このエキゾチックな雰囲気は極めて魅力的だが、同時にどれほど欺瞞的で危険だろうか[9]。

クールテルモンの記述には熱帯にあるインドシナへの嫌悪感、そして温帯にある雲南への親近感が溢れている。熱帯は、フランスの植民地認識の系譜では伝染病が流行る後進的で非文明的な地域だと考えられており、地域住民も病的なイメージを持つ人々と思われて

7)　Ibid. p.18 ;44.
8)　Ibid. p.138.
9)　Ibid. p.63.

いる（Clayton & Bowd 2006）。しかしこの温帯への親近感もまた同時に、母国ではない地域からのそれであるからこそ誘惑的な危険が潜んでいるため、ある種の警戒感を喚起していた。雲南に親近感と警戒感を同時に有するということは、帝国が不確実の未来と不安に満ちた地域を支配しようとする試みと見られ、いわゆる「植民地的状況」（La situation coloniale）（Balandier　2001）が生じたと言ってもよいだろう。

気候のみならず、帝国の視線も当然雲南にいた非漢民族まで延伸していった。クールテルモンは雲南の先住民族に対して、特に旅の道中で常に目したイ系民族について多数の記録を残している。

クールテルモンはイ人の男性に対して、「ロロ[10]の男性たちは背が高くて体格もいい。私たちを見詰めてくるが、しかし悪意がない」[11]と述べている。またイ人の女性に対して、クールテルモンは「ロロの女性は体格が頑丈で、脚は筋肉質で均整が取れている。大きな日傘を肩にかけ、とても短いスカートをはいて、何の邪魔もされずにさっさと歩いて野原から帰ってくる彼女たちは、面白いことにオペラコミックに出てくる農民娘のように見える」[12]と形容している。それはと対照的に、纏足する五、六才の漢人の女子に対し、クールテルモンは「不幸」と「愚か」という評価を下した[13]。

クールテルモンの雲南のイ族に関する印象は、自らの観察に由来していた一方で、雲南に関するそれまでの作品からの影響も受けているとみられる。クールテルモンが参考したエミール・ロシェ

---

10) フランス語の原文ではLoloと表記されているが、本研究では田畑（1994）を参照し、「ロロ」という日本語仮名表記を採用する。

11) Jules Gervais-Courtellemont, op. cit.p.71.

12) Ibid. p.28.

13) Ibid. p.248.

（Émile Rocher）の雲南省調査報告には、イ人の女性に対して「他の現地民族の女性より性的魅力（coquettes）をもち、精力的に男性と同じように田んぼで働く。纏足しない彼女たちは大変楽しそうに見え、陽気がある。顔立ちも美しく、いつくかの地域では省内で最も美しい女とされる」[14)]と記述されている。

ロシェの記述に対して、Michaud（2007:101）は「半分詩的、ジェンダーバイアスを帯びるスタイル（semi-poetic, gender biased style）」と評価している。事実、雲南の現地民族に対して性的な想像がある一方、このような言説の背後には、十七世紀以後のフランス社会思想と関係があると指摘されている。より具体的に言えば、啓蒙運動後、人類の多様性の自然主義観念が人々に受け入れられていた。そのため、文化相対主義の視点は西欧以外に住む「現地民族」を見る際に機能していた（Michaud 2007: 26）。同時に、同じく啓蒙運動と大革命の遺産とされる「普遍性」が、その光をヨーロッパより「後進」と見られた全ての「他者」に照射しようとするのもフランスの海外進出を裏付けた一つの思想だと指摘されている（Michaud 2007: 229）。

『雲南遊記』の出版は、フランス国内よりも、描かれた対象地域である雲南に大きな反響を引き起こした。雲南植民の野望に溢れるクールテルモンの筆調は雲南人から見れば非常に刺激的なものであった。同年代の雲南人にとって『雲南遊記』は、他の調査報告と比べて強い同時性を帯び、雲南人の自己認識の形成に多大な影響を与えていた。特に、フランス語の翻訳作業を行なった近代知識人の登場や、訳文を広範囲に流布させる印刷メディアの出現により、新しい局面へと展開してゆく。

---

14) Émile Rocher (1880)*La province chinoise du Yün-nan vol.2*,E. Leroux,p.11.

3.『雲南遊記』の響き：反仏ナショナリズムの創出

3.1『雲南警告』:亡国への危惧と反仏の序奏

フランスの雲南進出に対して、雲南人は無反応ではなかった。しかし鉄道敷設や鉱山開発をめぐって、蒙自と昆明でのフランス領事館に対する攻撃があったとしても、1900年まで雲南での反仏運動の主体は地方紳士と秘密結社が中心となり、広範な社会的動員を得られなかった（Metzgar 1976）。転機になったのは、1904年からフランスとの商業・政治などに対応する需要が増えたことを背景として、雲南政府が留学生をハノイに派遣したことであった。統計によれば、1911年まで雲南からベトナムへの留学生派遣が３回あり、のべ30人以上の雲南人学生がハノイでフランス語や建築学などを学修させられていた（許 2022）。

ベトナムにいた雲南人留学生はフランスによるインドシナ植民の状況を経験し、現地での観察と感想を『雲南警告』という冊子を作って載せていた。冊子には、当時パリ大学法学部に留学した福建人陳籙が訳したクールテルモンの『雲南遊記』の序言と解説が収録されている。「仏人の狙いは必ず雲南にある」と強調した陳は、序言でフランスが雲南を図る理由をまとめた。具体的には、まず国際的な理由として日本とイギリスよりも早く雲南を確保することである。次に経済的な理由として鉱山資源と鉄道敷設によって雲南での開発を進めることである。さらに陳は、「雲南は気候が温和でフランスの南境によく似る。それがフランス人にかなり適している」のも一つ重要な理由であるという[15)]。

---

15) 留越学生（1906）『雲南警告』,pp.1-5.

『雲南警告』の本文には、フランス植民下の安南の亡国の惨状が載せられている。作者によると、20年の植民を経たベトナムではその人口が半減し、蜂起を指導できる人物もいなくなっている。加えて大量の税金が課され、重い刑罰も課され、その結果「男は彼ら[フランス人を指す]に牛馬のようにこき使われ、女は彼らの婢や妾となっている」という[16)]。

実際、清末期の中国で広く流布した「亡国史」という題材には、他国の「亡国」の現状を描くことを通じて自国の亡国への危惧を喚起する狙いが見られる。ポーランド、エジプト、インド、ビルマ、朝鮮、ベトナムなどの亡国史が続々と中国語の新聞雑誌に掲載され、「救亡」を背景として中国人の知識人階層に大きな刺激を与え、反外国主義のナショナリズムを喚起することに成功していた（鄒 1996:325-355）。

『雲南警告』は、『雲南遊記』の紹介、ベトナム亡国史の掲載などの方法を通じて、フランスによる雲南植民に対する雲南人の警戒感を高め、他者の存在によって自己意識の変容を促した。しかし、ベトナムでは留学生が人数的に少なく、加えて出版地の制限で流通範囲が比較的に小さかったため、冊子の影響力は限定的であったと言える。反仏ナショナリズムの嵐を煽動したことを実現させたのは、同時代に日本へ留学した雲南人が作ったもう一つの雑誌メディア、『雲南』の出現からである。

3.2 雑誌『雲南』と反仏ナショナリズムの高潮

1906年の秋、日本に留学していた雲南人が東京で雑誌『雲南』を発刊した。『雲南』は1911年まで存続し、合計23号まで出版され

16) 上掲書、pp.8-9.

た。雑誌の発行部数は最初三千部だったが、ピーク時には一万部を超えたと指摘されている（木 1996）。1908年、留学生が集まる東京と中心に政府反対の活動を展開していた革命党を警戒し、清政府は明治政府に委託し、革命思想を掲げた中国語の新聞雑誌に対して調査を行った。結果として、革命新聞とみられた『民報』が発行停止になり、清政府反対を紙面に出していなかった『雲南』は出版を続けていた（永井 1972）。

フランスの雲南進出を警戒した『雲南』の編集者はフランス語資料を中国語に翻訳し、フランスの動向を読者に伝えている。『雲南』第３号、第４号、第６号および第９号には、クールテルモンの『雲南遊記』の訳文が掲載されている。訳者が大悲、長太息生、直斎氏と記されているが、そのうち直斎は『雲南』編集者の趙伸であることを確認できる。また訳文の内容をみれば、陳籙の抄訳と違う用語や表現が使用されていたため、これは新訳と考えられる。さらに分量からみれば翻訳された文は295ページを有する原文のわずか十分の一ほどであった。訳文は原文内容から連続的に翻訳されておらず、概ね最初の28ページから抜粋されたものと見られる。

第３号の『雲南遊記』の訳文の前には、訳者による序文が載せられている。その序文には「我々の臥榻の内側のような近いところに、もとよりフランスのような陰険で残酷な国があったのか。[我々は]眉根を寄せて顔をしかめて[フランスの存在を]知らせ合い、席を蹴って立ち上がり、精神を高揚させ正義感を満たし、愛国の精神を二十世紀において大いに発揮しよう」[17] とあり、『雲南遊記』を翻訳・掲載することで雲南人の愛国心を喚起しようとした。

原文と対照すれば、訳文は基本的に原文の意味に従って訳された

17) 法人古德爾孟著,大悲訳（1906）「雲南遊記」『雲南』(3),pp.69-81.

ことがわかる。しかし、原文にはない内容が補充され、刺激的な言葉遣いが使用された箇所もみられる。例えば、纏足する中国人女性に対する評価について、原文では「我々にとって理解できないある種の魅力がある（un charme incompris de nous）」[18]と評価されている。しかし『雲南』の訳文では「我々にとって非常に理解しにくい」と訳した後、さらに「我々からみると、これは世界中で最も愚かな者、最も野蛮な者、最も無用な者は、シナの婦人にほかならない。ある日亡国滅種になる原因はまさにここにある」[19]と添えて、原文にはない過激な表現を加筆している。

言うまでもなく、『雲南遊記』は読者層に大きな反響を呼んだ。雑誌社によれば、連載が始まってから数ヶ月の内に、単行本の出版について40件以上の問い合わせが殺到した。それに応じて、社は単行本の予約販売のキャンペーンを企画した。予約販売の広告には、原著名を「仏人が必ず雲南を取る原因及びその方法」と改名し、「雲南が滅ぶ理由についてこの本は一番触れており、我が雲南人を殺す刃物となる」と宣伝している。そしてフランス人が雲南に進出する理由について、鉱脈と物産の豊富さ、気候の温和さ、官僚の腐敗などが挙げられている[20]。

また、広告では雲南とベトナムの類似性が強調されている。「雲南は物質上、実業上、地理上、攻守上からベトナムと極大な関係を有し、今雲南を取らなければ、必ず安南を長く占拠することができ

---

18) Jules Gervais-Courtellemont, op. cit.p.28.

19) 雲南直斎氏訳者・仏人周伯熙（1907）「雲南遊記・続第六号」『雲南』(9),p.71.

20) 雲南雑誌社「仏人必取雲南之原因及其方法出版予約券発行広告」中国社会科学院近代史研究所近代史資料編輯室主編（2013）『雲南雑志選輯』知識産権出版社,pp.782-783.

ない」[21]と述べられている。

雑誌で雲南とベトナムとの関係が強調されたことは、むしろフランスの進出により、両地域間に新たな連帯関係が作られたことを意味している。『雲南警告』と同じように、『雲南』ではベトナムの亡国の惨状を描く文章が掲載されていた。しかし『雲南警告』と異なり、『雲南』では第三者の視点からの描写のみならず、植民されていたベトナム人の「肉声」が雑誌の紙面に載せられ、読者に直接に届けられていた。『雲南』では、当時日本でフランスの植民地支配から独立しようとした東遊運動の組織者であるファン・ボイ・チャウ（潘佩珠）の文章が三つ掲載されている。

チャウはベトナムと雲南の関係を説明するため、まずベトナムの人種の歴史を遡った。チャウによると、ベトナムに居住する主要な人種は、秦漢以前は貉族だったが、その後漢人が増え、「その智巧の性質によって貉族を圧しそれに勝った」ため、明清期に至ると「ほぼすべて漢種になった」。チャウはまた、「雲南とは我が祖先人種の人々の国であり[…]我がベトナムの二つの大河、一つがメコン川、一つが紅河、その源は皆雲南から発する」と述べ、雲南を「我が兄弟国」と呼び、雲南とベトナムの緊密な関係を語っている[22]。

事実、チャウは中国語の新聞雑誌で漢族中心主義的な発言を繰り返し、中華的価値を称揚した一方、ベトナム人に向けて自国のメディアで強い自国意識を表出していた（張2020）。それにもかかわらず、チャウの文章は雲南人からの強い共感を呼んだ。『雲南』の編集者の一人である趙伸は亡国史を編集する理由を次のように説明している。趙は「これをまもなく亡国となる民衆に献上し［…］それを聞く人はもし少し人の心を有すれば、大いに覚醒し、そして自ら

21) 上掲書、pp.782-783.
22) 越南巣南子（1907）「哀越弔滇」『雲南』(6),pp.99-109.

早期に計画をしよう」と呼びかけ、雲南の将来に警鐘を鳴らしている[23)]。

『雲南』では「亡国者」とみられたベトナム人の文章を掲載し、当事者の証言を通じてベトナム人への同情と自国の亡国への恐怖を同時に喚起し、さらなる高い反仏ナショナリズムを高揚させた。そして、フランスへの警戒感と「亡国」への恐怖心を煽り立てた『雲南』では、一つ解決案が出されている。それは、中華的価値に戻るわけではなく、むしろ近代的価値を受け入れ、近代国家の建設を通じてフランス帝国の支配に対抗することである。

4. 受容と抵抗：まなざしの内面化と「軍国」への志望

先述したように、中華世界の価値観において雲南は帝国の中心から遠く離れた「蛮夷と瘴癘の地」とみられていた。しかしフランス人の雲南言説を受け入れた雲南の知識人からみれば、それは誤りであり、修正すべき印象だと考えられていた。雑誌の構成員である李複によれば、「中原の人士は『雲南』という言葉を聞くと、それを話す価値がないと考える人がいるようである。素直に言う人はそこを『蛮』といい、婉曲的に言う人はそこを『辺遠』といった」[24)]。この認識に対して、李のみならず、『雲南』の作者らはこれがあくまでも「中原の人士」の印象に過ぎず、実際雲南は「山川が秀偉、気候が温和、土地が肥沃、鉱産が豊富」[25)]な地域だと反論している。

『雲南』の作者らは『雲南遊記』で語られる雲南の気候に関する

23) 直斎「腥風血雨録」中国社会科学院近代史研究所近代史資料編輯室主編（2013）『雲南雑志選輯』知識産権出版社,p.627.

24) 社員李復（1908）「紀戊申元日本報周年紀念慶祝会事」『雲南』(13),pp.119-127.

25) 侠少（1906）「雲南之将来」『雲南』(2),pp17-25.

言説を引用し、雲南の気候の温和さを証明しようとしていた。雑誌の紙面には、「その気候は温和であり、植民に適している。仏人クールテルモンがいったように、気候から論じれば、雲南は越南の版図に編入して良い」[26]とあり、または「仏人クールテルモン曰く、雲南は気候が温和であり、フランスの南境と最も似ている」[27]とあり、そして「越南には瘴烟があるため衛生的に良くない。雲南は気候が適宜であり、植民地として取られるのは最も適切だ」[28]という記述が複数の箇所で確認できる。

『雲南』の作者は植民者の言説を吸収し、旧来の中華世界における地域像と比べて、『雲南遊記』に描かれた温和な気候と豊富な鉱産を有する地域像こそ正確だと論じていた。これは、近代世界の周縁に生きた雲南人が、中心から注がれてきた強いフランス帝国のまなざしを内面化し、中華世界で生産された周縁のイメージを更新しようとした営みと見られる。そうすると雲南は、中華世界での辺縁地ではなくなり、むしろフランス植民帝国の最前線としてフランスの植民から守る価値が十分ある地域となったといえる。

フランスの雲南植民を避けるために、雑誌では雲南に「軍国国家」を建設する必要性が指摘されている。著者によると、「そもそも国家の進化は三つの段階がある。一つ目は神権国家であり、二つ目は宗法国家であり、三つ目は軍国国家である」という。そして軍国国家もまた「複成の軍国国家」、あるいは「連邦国家」とよばれ、「中央政府が外交と内政の綱要をもち、そして各部分において

26) 雲南雑誌社（1907）「看!看!!看!!!法国雲南之殖民康健」『雲南』(5),pp.149-150.
27) 江澤（1906）「論殖民之種類論殖民之種類(摘抄殖民論第三章)」『雲南』(1),pp.79-85.
28) 無己（1907）「論雲南対于中国之地位」『雲南』(5)pp.1-15.

領域内の地方行政は自治で行う」ことを主張している[29]。この文では、社会進化論の色が強く、雲南を国家進化の座標軸の最先端に位置づけられた「軍国」という国家形態へと変貌させる方法が論じられている。

ただ、ここでいわれる「軍国国家」の建設には、雲南が西南中国の一省として国家的一体感を前提として考案されたことを忘れてはならない。著者は「広義で言えば、雲南が中国の雲南であるため、その存在が中国の障壁となり、その滅亡が中国を瓜分する動機となる。一部分を取り除けば全体に傷つけて、髪の毛一本引っ張れば体全体が動く。これは有機体の共通する原則であり、また社会が逃れられない公例である」[30]と社会有機体論から雲南と中国の関係を論じている。

以上のことから、『雲南』の編集者と作者は、フランスがもつ近代的なまなざしを内面化する一方、フランスの雲南植民に抵抗する唯一の方法が近代的な手段、つまり近代国家の建設にあると考えられていた。フランスの雲南言説は反仏ナショナリズムを刺激するための材料となったのみならず、「鉱山」、「気候」、「衛生」などの観念の導入により雲南をめぐる認識を更新させ、中国全体にとっての雲南保全の重要性を増大するという効果をもたらした。また、「軍国」、「連邦」、「自治」などの近代思想の受容によって、雲南人の思考様式に根本的な変容がもたらされ、地域自体も空間的国家化への構造転換を迎えた。その時点から、雲南は近代への道を歩みはじめた。

29) 上掲文、pp.1-15.
30) 上掲文、pp.1-15.

5. 結論

本研究では中華世界の周縁と西欧・近代世界の周縁として同時に認識されていた雲南が、非主体化を強いられた過程のなかで、地域独自の文脈から近代雲南人の主体性の獲得を検討してきた。

本研究を通じて、三つの点を析出することができる。第一に、「二重の周縁」として雲南社会の地域特性が確認されている。「西南」と「極東」は単なる地理的概念ではなく、二つの価値体系が接し合う地域としての雲南が二つの帝国のまなざしの中に置かれ、異なる語り方で語られてきたことを意味している。しかしまったく正反対のようにみえる二つの雲南言説には、雲南を未開発な地域として、そこを自らが支配する場所としてみるという考えが含まれている。

第二に、雲南の近代におけるフランス殖民地帝国の役割が明らかになった。フランス語の文献で語れられた雲南像は、雲南が自身を認識する材料を提供したのみならず、雲南人がそれを内面化して新しい自己認識を作り出したという「予想外」な結果をもたらした。フランスは雲南人による強い脅威と考えられた一方、国家進化の「鉄則」を展示するモデルとして、国民国家の思想と体制の受け入れに決定的な役を演じていた。

第三に、近代雲南人のアイデンティティの再構成とメディアの関係が検討されてきた。周縁から中心を見るという視角の転換によって、本研究では雲南人が作った新聞雑誌のテキスト分析を通じて、具体的にどの作品が、どの意味で雲南人の自他認識に影響を与えたかを実証分析を通じて明らかになった。

要するに、本研究は雲南が「自主的近代」に向かって踏み出した最初の一歩を描き、近代雲南の社会史研究にもう一つのアプローチ

を提示している。分析の結果をふまえた上で、雲南の近代を研究するためには、少なくとも二つの議論をさらに進める必要がある。すなわち、第一は、近代雲南の知識人がいかに自らの思想を行動の指針に転換させ、革命を通じて雲南で近代政府の樹立を実現させたか、ということである。第二は、中華民国期における地方と中央のダイナミズムを生かし、雲南がいかに地域の独自性と中国の一体感を同時に保っていたか、ということである。

論文投稿日: 2023年 10月 27日
審査完了日: 2023年 12月 23日
掲載決定日: 2023年 12月 29日

参考文献

<日本語>

李政勳著，金友子訳(2014)「東アジア言説、行く路来る路：白永瑞『核心現場から東アジアを問い直す』の内外を考察する」『創作と批評』https://magazine.changbi.com/jp/archives/89157?cat=2483（検索日:2023-10-10）

石島紀之 (2004)『雲南と近代中国：「周辺」の視点から』青木書店

川野明正（2005）『中国の「憑きもの」:華南地方の蠱毒と呪術的伝承』風響社

栗原悟（2011)『雲南の多様な世界 : 歴史・民族・文化』大修館書店

篠永宣孝(1992)「雲南鉄道とフランス帝国主義 : フランス外交文書に依拠して」『土地制度史学』34(4),pp.37-50.

シャンタル・メジェ著, 清水由希江訳（2015)「フランス・ドイツの歴史研究における「極東への関心」足羽與志子他編『平和と和解』旬報社

武内房司（2003）「近代雲南錫業の展開とインドシナ」『東洋文化研究』(5)pp.1-33.

田畑久夫（1994）「鳥居龍蔵のfield survey：西南中国ロロ族調査を中心に」

『兵庫地理』(39) pp.19-38.
永井算巳（1972）「民報封禁事件」『東洋学報』 55 (3), pp.296-331.
白永瑞著,中島隆博解説 （2016）『共生への道と核心現場：実践課題としての東アジア』法政大学出版局
E.W.サイード著,今沢紀子訳（1993）『オリエンタリズム（上）』平凡社
K.M.パニッカル著, 左久梓訳（2000）『西洋の支配とアジア（1498-1945）』藤原書店
<中国語>
胡暁真（2017）『明清文学中的西南叙事』台湾大学出版中心
蒋中礼・王文成編（2011）『雲南通史·第五卷』中国社会科学出版社
林超民（2010）『林超民文集(第四巻)』雲南人民出版社
木基元（1996）「『雲南』雑志及其革命影響」『雲南社会科学』(3),pp.79-84.
孫歌（2011）「横向思考的東亜図景：評白楽晴与白永瑞近作」『台湾社会研究季刊』(82),pp.213-243.
王明珂（2007）「由族群到民族:中国西南歴史経験」『西南民族大学学報』28(11),pp.1-8.
許新民（2022）「雲南学生留洋」『中国大百科全書』https://www.zgbk.com/ecph/words?SiteID=1&ID=642421&Type=bkztb&SubID=698（検索日:2023-10-10）
楊斌著,韓翔中訳 （2021）『流動的疆域：全球視野下的雲南与中国』八旗文化
鄒振環（1996）「清末亡国史『編訳熱』与梁啓超的朝鮮亡国史研究」『韓国研究論叢(第2輯)』上海人民出版社
張軻風（2010）「歴史時期『西南』区域観及其範囲演変」『雲南師範大学学報』(5)pp.37-45.
張軻風（2012）「異様的目光:明清小説中的雲南鏡像」『明清小説研究』(4),pp.17-28.
張哲挺（2020）「越南愛国志士潘佩珠之双元性中華観」『漢学研究』38(3),pp.297-338.
<英語>
Clayton, Daniel & Gavin Bowd. (2006). Geography, tropicality and postcolonialism:

Anglophone and Francophone readings of the work of Pierre Gourou. *Espace géographique*, 353(3), pp.208-221.

Cox, Euan Hillhouse Methven. (1945). P*lant-hunting in China : a history of botanical exploration in China and the Tibetan marches.* Collins.

Metzgar, H. Michael (1976). The crisis of 1900 in Yunnan: Late Ch'ing militancy in transition. *The Journal of Asian Studies*, 35(2), pp.185-201.

Michaud, Jean. (2007). *'Incidental' ethnographers: French Catholic missions on the Tonkin-Yunnan frontier, 1880-1930*. Brill.

Pratt, Mary Louise. (2007). *Imperial eyes: Travel writing and transculturation*. Routledge.

Summers, Tim. (2013). *Yunnan–A Chinese Bridgehead to Asia: a case study of China's political and economic relations with its neighbours*. Chandos.

<フランス語>

Balandier, Georges. (2001). *La situation coloniale : approche théorique. Cahiers internationaux de sociologie*, (110), pp. 9-29.

Blais, Hélène ; Deprest, Florence &Pierre, Singaravélou. (2011) Introduction. Pour une histoire spatiale du fait colonial. Blais, Hélène,et al. (ed.), *Territoires impériaux : Une histoire spatiale du fait colonial*. Publications de la Sorbonne.

Liétard,Alfred. (1913). *Au Yun-nan: Les Lo-lo p'o, une tribu des aborigènes de la Chine méridionale*. Aschendorff.

Abstract

Between "Southwest of China" and "the Far East" Thinking Modern Yunnan under a "Double Periphery" Perspective

Dong Ziang

In Chinese, Yunnan means the south side of the clouds. Yet, where exactly is Yunnan? Existing in the Chinese Empire's imagination, it is located under the clouds drifting in the Empire's southern sky: a marginal area inhabited by many ethnic groups. However, from the mid-19th century, Yunnan was portrayed in a large number of travelogues written by the French as a land of unexplored beauty, a land which was considered to be very similar to Southern France. There is no doubt that such writing was a reflection of French colonialism, but it was also a departure from the traditional Chinese description of Yunnan as a borderland of barbarians. This study therefore attempts to analyze how Yunnan was constructed as a double periphery (Southwest of China and the Far East of France) at the intersection of imperial gazes. Furthermore, this study analyzes the newspapers published by modern Yunnan intellectuals, and explains how they thought about the characterization of being peripheries and how they created the subjectivity.

Key words: Double Periphery, Yunnan, Gaze, Modern, Media